

(図画工作科)

楽しく表現活動に取り組み、自らつくり出す喜びを味わう

図画工作科学習の研究

大阪市立片江小学校 北村嘉隆 白山恭子 西川あや

1. はじめに

本校では、確かな学力、豊かな心、健康な体の調和を重視する「生きる力」をはぐくむことを学校経営の重点として設定し、取り組んできた。「確かな学力」「健康な体」の両面については、全国学力状況調査や体力・運動能力調査の結果などにおいて、はっきりとした数字として知ることができる。しかし、「豊かな心」については、他の二つのように数字で示すことができるものではなく、取り組みも漠然としたものであった点が否めない。

昨今の子どもたちの社会性の問題点を考えると、その原因としては相手の気持ちを推し量る「想像力の欠如」が考えられる。いじめの問題も、いじめることによって相手の気持ちにどれほど傷つくのかを、深く考えることができないことが大きな要因であると考えられる。

また、インターネットの発達とパソコンや携帯電話、スマートフォンの普及によって、現実での体験が減少することで、仮想空間と現実との区別がつかずに、適切な人間関係を築くことのできない子どもが年々増加しているように感じられる。

本校の児童は全体的に仲が良く、深刻ないじめや対立の構図は非常に少ない。しかし、先に述べた「想像力の欠如」という問題は、本校児童においても例外ではなく、友人関係を築くのが不器用な児童、友人関係に悩む児童は少なくない。この問題の解決のために最も重要なことは、「豊かな情操」を身につけることである。

「豊かな情操」を身につけることは簡単ではない。時間はかかっても、感動できる本を読み、美しい景色に触れ、よい音楽を聴き、優れた絵画を見、尊敬できる人に出会う、そんな実体験の積み重ねが大切である。そこで、平成26年度より図画工作科を研究教科と定め、子どもたちに「豊かな情操」が育つことを願い、研究主題を「楽しく表現活動に取り組み、自らつくり出す喜びを味わう図画工作科学習の研究」とし、研究に取り組んだ。

2. 研究の内容

本校では今年度、低・中・高学年の部会に分かれ、それぞれが望ましい子ども像をめざして、次のような研究の視点で授業実践に取り組んだ。

(1) 望ましい子ども像

○すすんで表現活動に取り組む子ども

○楽しく、自分の思いや考えを表現しようとする子ども

○自分の表現・友だちの表現のよさに気づき、学び合い、高め合うことができる子ども

(2) 研究の視点

①子どもが自らすすんで表現活動に取り組もうとする題材の工夫を行う。

②子どもが自分の思いを表現するための指導法を工夫する。

③子どもが作品のよさや面白さを感じとり、互いに認め合うための鑑賞の仕方を工夫する。

○実践例

(1) 4年「コロコロ迷路」(工作)

- ・道を作るための3センチメートル幅の段ボールを用意することで、迷路を作ること集中できた。きちんと作れることで、楽しみや達成感を感じられるため、効果的であった。
- ・3センチメートル幅の段ボール以外にも、柔らかい段ボール紙やいろいろな大きさの段ボールを用意した。3センチメートル幅の段ボールを使い、ある程度の道を作り、それから自分の好きな大きさのものを使って、高さの工夫をしたり、隠し窓などのしかけを工夫したりする姿が見られた。曲がった道を作るときには、柔らかい段ボール紙を使う児童も多かった。
- ・底に3センチメートル幅の碁盤の目を書くことで、ビー玉が通る幅が意識でき、安心して作ることができた。

(2) 1年「ごちそうパーティーをはじめよう！」(立体)

- ・入学当初から、自由に粘土遊びができる環境を用意した結果、においや手触りを嫌がることなく意欲を持って活動に取り組めた。
- ・粘土で立体的に表現することが難しかったため、算数科「かたちあそび」の学習時に粘土で立体(ボールのかたち・つつのかたち・はこのかたち)をつくる体験をした。その結果、立体的に表現できるようになってきた。
- ・ヒントコーナーに掲示している粘土の技法や飾り方の見本、ごちそうのイラストを見ながら、自分たちでどんどん活動をすすめていくことができた。

3. 研究のまとめ

(1) 研究の成果

- 魅力的な題材とするために、興味を惹きつけるような題材名にしたり、今まで扱うことのなかった素材を学習材としたり、分かりやすく具体的な掲示物を用いたりすることで、児童一人一人が意欲的に学習に取り組むことができるようになった。
- 授業の導入や場の設定を工夫したり、題材に応じた技法を学習したりすることで、子どもたちは楽しく表現活動に取り組み、自らつくり出す喜びを味わうことができた。
- 自分の作品について発表したり、互いの作品を鑑賞したりすることで、児童は自分や友だちのよさに気づき、表現することへの意欲をさらに高めることができた。
- 計画的に図画工作室と準備室の整理を行った。また職員に協力を呼びかけ、カップや空き箱などの多くの材料を集めることができた。それらの材料を使いやすく分別・整理することで、図画工作室の環境が整い、指導をスムーズに行うことができた。

(2) 今後の課題

- 児童が楽しく表現活動に取り組み、自らつくり出す喜びを味わうことができるような題材の開発をさらに進める。
- 「造形遊び」、「絵」、「立体」、「工作」、「鑑賞」の授業時数が、バランス良くなるように年間指導計画を立てることが望ましいが、学校行事や児童の実態により、偏りができてしまうことがある。
- 表現活動を支える効果的な指導過程や支援、評価のあり方をさらに研究する。